

# シンガポールおよびマレーシアにおける華人会館の変容と新たな役割： そのネットワークの構築、現地化およびグローバル化

合 田 美 穂

## The Transformation and the New Roles of Chinese Associations in Singapore and Malaysia : Issues in Networking, localization and Globalization

GODA Miho

**Abstract:** This study examines the changes taken place in Chinese Associations in Singapore and Malaysia since their independence, focusing on the latest developments and the new roles of Chinese Associations from the perspectives of networking, localization and globalization.

要約：本研究は、シンガポールおよびマレーシアの華人会館が、独立を経て、それぞれどのように変容してきたのか、また、特に近年になって、どのような動きがみられるのかといったことをまとめたものである。特に近年の華人会館にみられる新たな役割（ネットワークの構築、現地化 および グローバル化）という視点から考察を行っている。

### 1. はじめに

マレーシアの華人の歴史は、漢代にまでさかのぼることができる。唐、宋時代には、中国とマレー周辺地域にはすでに頻繁な商業活動および文化活動が行われていた。明の時代になると、現地に定住する中国人に関する明確な記述が存在している<sup>1</sup>。当時、船団を率いた鄭和が、何度もマラッカに停留し、その後、マラッカ、現在のインドネシアのスマトラ島に位置するパレンバン、同じくインドネシアのジャワ島に位置するスラバヤに華人の居住地が作られ、鄭和の艦隊が寄港した。特に、マラッカ王国は鄭和艦隊の保護下で成長し、中国の艦隊の来航が途絶えた後も東西貿易の中継港として栄えた。当時、多くの福建省出身の華人がマラッ

カに移住し、華人は、マラッカにおける重要な民族グループの1つとなった<sup>2</sup>。

現地に多くの華人移民が渡り、華人コミュニティがいたるところに形成されるようになるのは、19世紀になってからである。アヘン戦争における清の敗戦によって、中英政府は『北京条約』に調印し、清朝が、外国人商人が、海外で中国人を雇用することを許容してからは、体力労働に従事する労働者が大量に、英国の植民地であったマレー半島へ、錫鉱山や農園の労働者として就労に向かうことになり、現地では大規模な華人のコミュニティが出現するようになった<sup>3</sup>。

一方、シンガポール華人の歴史は、19世紀まで遡ることができる。1819年、英国のラッフルズのシンガポール上陸と同時に、シンガポールが貿易港として開港し、労働力不足を補うために、中国から多くの

<sup>1</sup> 許雲樵著『南洋史（上巻 第二篇 古代史）』、新加坡世界書局、1961年、165頁。朱傑勤著「元明時代中國人在東南亞各國的活動」、『東南亞華僑史』、中華書局、15頁。

<sup>2</sup> 潘翎主編、崔貴強編訳『海外華人百科全書』、三聯書店、1998年、48-49頁。

<sup>3</sup> 潘翎主編、崔貴強編訳『海外華人百科全書』、三聯書店、1998年、172頁。

人々が労働者として受け入れられ、マレーシアと同様に華人コミュニティが出現した<sup>4</sup>。

19 世紀以降、シンガポール、マレーシアに移った華人たちによるコミュニティは、基本的には出身地（主に中国華南地域）ごとによるものであり、その中核をなしたのが、華人が設立した組織である<sup>5</sup>。現地の政府から何の支援も得られなかった華人たちは、相互扶助のシステムである出身地や方言を基礎とする組織を次々と設立していった<sup>6</sup>。これら華人たちの組織は、シンガポールでは一般的に、「華人会館」または「宗郷会館」と呼ばれている。宗郷の「宗」は宗親つまり血縁を指し、「郷」は同郷つまり地縁を指す。華人会館とは、華人の血縁および地縁による組織のことである。シンガポールおよびマレーシアでは、独立前までは、地縁組織は増加を続けていたものの、新移民が減少した独立後の増加は、ほとんど見られなくなっている。

華人会館のなかには、「広東呉氏書室」や「潮州楊氏公会」といったように、血縁と地縁が一体化した会館も少なくない。筆者の知人で先祖が広東省潮安県出身という黄氏は、「広東会館」、「潮州八邑会館」、「潮安会館」、「潮州江夏堂（江夏とは黄姓を示す）」など、複数の華人会館のメンバーを兼ねている。黄氏のように、先祖がその土地の出身者であるというだけで、そこで生まれ育っていないにもかかわらず、先祖と関連する宗郷会館に重複して入会しているという人は少なくない。同義として捉えられがちで、海外における日本の県人会と異なる点はここである。

本研究では、シンガポールおよびマレーシアの華人会館が、独立を経て、それぞれどのように変容してきたのか、また、特に近年になって、どのような動きがみられるのかといったことをまとめ、特に近年の華人会館にみられる「ネットワーク」、「現地化」および「グローバル化」という視点から考察し、比較を行ったものである。

## 2. 華人会館の役割

シンガポールおよびマレーシアにおける華人会館は、大きく 3 つの性質に分類されている。上述の血縁組織および地縁組織以外には、生業を同じくする業縁組織がある。

まず、血縁組織について言えば、広義の意味での血縁であって、親族であるとは限らない。先祖まで遡ると、血縁関係に辿り着くと考えられる同姓によるものである。また、中には単一の姓による組織だけではなく、いくつかの姓の人々によって組織されたものもある。血縁組織では、シンガポールで最初に設立されたものは、曹を姓とする人たちによる「曹家館（1819 年設立）」である。シンガポールの血縁組織では、1920 年代から 1930 年代に設立されたものが半数以上を占めている<sup>7</sup>。マレーシアで最初に設立されたものは、黄を姓とする人たちによるマラッカの「馬六甲江夏黄氏宗祠（1825 年）」である。次に早いのが、邱を姓とする人たちによるペナンの「檳城龍山邱公司（1835 年）」である。両者は現在も継続して存在している<sup>8</sup>。

次に、地縁組織について言えば、省、府、県、郷、村といった様々なレベルのものが存在する<sup>9</sup>。シンガポールおよびマレーシアでは、中国華南地方を由来とする組織が大半を占めており、基本的には、それぞれの地域で使用されている方言に基づいて組織されている。例えば、広東省の場合では、広東語を使用する人々、潮州語を使用する人々、海南語（現在の海南省は、当時は広東省の一部であった）を使用する人々、客家語を使用する人々などによって、組織が細分化されている<sup>10</sup>。シンガポールで最初に設立された地縁組織は、「寧陽会館（1822 年）」である。

<sup>4</sup> 海外華人の歴史については、以下を参照：合田美穂「華人の歴史」、山下清海編著『華人社会がわかる本』、明石書店、2005 年。なお、本稿のシンガポールに関する部分全般は、以下からの参照によるものが大きい：合田美穂「シンガポールにおける華人会館の変容と新たな役割」、『静岡産業大学研究紀要 環境と経営』第 20 巻（第 2 号）、2014 年 12 月。

<sup>5</sup> 呉華『新加坡華族會館志 第一冊』、南洋学会出版、1975 年、1 頁、22 頁。

<sup>6</sup> 王慶武「東南亞新興国家中の華人群族性」、新加坡亞洲研究学会、2006 年、18 頁。

<sup>7</sup> 当時設立された組織で、現在まで活動が継続されている組織はいくつもある。例えば、「南安会館（1924 年設立）」は、福建省南安出身者によって設立された地縁組織であり、設立の目的は、同郷との交流を深め、福祉の向上にともに努めることと、鳳山寺の運営である。「義安公司（1830 年設立）」は、広東省潮州の出身者によって設立された地縁組織であり、設立の目的は、同郷との交流を深めることであり、かつては、墓地を購入して同郷人のための埋葬業務も行っていた。「福清会館（1910 年設立）」は、福建省福清出身者によって設立された地縁組織であり、設立 20 年以内に小学校、医院を設立するなど、同郷人および現地の華人の福利厚生や教育活動に貢献してきた。

<sup>8</sup> 李雄之「根系河洛的馬來西亞血緣性組織」、『海峽之聲』、2012 年 09 月 07 日。

<sup>9</sup> 呉華『新加坡華族會館志 第一冊』、南洋學會出版、1975 年、28 頁。

<sup>10</sup> 陳韋賡「從福州人移民海外談起」、『三山季刊』、第 49 期、出版年不詳、2 頁。

マレーシアには 100 年を超える歴史を持つ華人会館が 83 あり、最も古いものには、マラッカの「増龍会館 (1792 年)」、同じく「惠州会館 (18 世紀)」、ペナンの「檳城廣汀会館 (1795 年)」、同じく「増龍会館 (1801 年)」や「嘉應會館 (1801 年、設立当時の名称は「仁和公司)」」等がある<sup>11</sup>。

19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてのマレーシアおよびシンガポール華人社会では、華語 (北京官話) がまだ普及しておらず、華人は、主に自らが話す方言ごとに、生活圏を異にしていた。よって、当時の業縁組織も同様に、方言色が強かった。例えば、「新加坡樹膠公会 (1919 年設立)」<sup>12</sup> は、ゴムの製造及び加工品を取り扱う業者の組織であるが、その大半の加入者が福建省南部 (同安など) を出身地とする華人であった。「新加坡当商公会 (1920 年設立)」は、質屋を営む店によって組織され、大半の加入者が客家系華人であった<sup>13</sup>。「新加坡車商公会 (1932 年設立)」は、設立当初は自転車業を営む業者によって組織され、人力車、自動車業務へと発展した組織であるが、大半の加入者が福建省北部 (福清、興化など) 出身の華人であった<sup>14</sup>。よって、当時設立された多くの業縁組織は、地縁組織を兼ねていたとも言える<sup>15</sup>。

当時のシンガポールおよびマレーシアでは、これら地縁、血縁、業縁組織が、華人社会では重要な役割を果たしていた。当時、中国からの移民は、シンガポー

ルに到着すると、まず自分の出身地または方言グループと関係のある組織に出向き、その会館のメンバーとなり、会館から仮の住処や仕事を提供してもらうことが少なくなかった<sup>16</sup>。華人会館は、メンバーに対してこのような便宜を図るだけではなく、故郷との連絡役 (手紙の中継地など) を担ったり、また埋葬の手配などを行ったりもしていた<sup>17</sup>。華人社会において、経済的に成功した華人の多くは、華人会館の中で要職に就き、華人会館を経済的に支えた。そして、華人会館は成功した華人たちに支えられて、その影響力を更に大きくしていったのである<sup>18</sup>。

20 世紀初期の華人社会の指導者といわれた陳篤生 (タン・トックセン)、陳金鍾 (タン・キムチン) 父子、1930 年代から終戦直後にかけて、東南アジアと中国で屈指の影響力を持っていた陳嘉庚 (タン・カーキ)、1950 年代の豪商で南洋大学設立に貢献した陳六使 (タン・ラクサイ) は、それぞれ福建会館の会長職を歴任してきた。歴史的にみても、著名華人企業家は、自分と関係する華人会館で主席あるいは会長と呼ばれる要職に就き、会館を核とする華人社会の中で、指導者として君臨し、華人会館を通して華人社会を支えてきたのである<sup>19</sup>。

各組織の目的は、「同郷人のための福利厚生と教育」という点で、ほぼ共通していた。例えば「本館は、方言を同じくする者の交流を図り、商工業の発展を推し

<sup>11</sup> 文平強「馬來西亞華人社團一角色、功能與特性」、『馬來西亞華團總名冊』、星洲日報、馬來西亞中華大會堂總會 (華總) 聯合出版、出版年不詳、第 19 頁。早期の華人会館の多くは、廟の建立後に、廟に併設される形で (または廟の内部に)、会館が設立されることが多かった。また、廟が会館を兼ねているケースも見られた。その視点でいえば、マレーシアのマラッカにある「青雲亭 (1673 年)」がマレーシアで最も早く出現したものであると言える。

<sup>12</sup> 新加坡樹膠公会については、以下を参照：「福建省情資料庫」<http://www.fjsq.gov.cn/ShowText.asp?ToBook=3161&index=1880&>

<sup>13</sup> 新加坡当商公会については、以下を参照：「新加坡当商公会ホームページ」<http://www.singpaw.n.org/index.cfm>

<sup>14</sup> 新加坡車商公会については、以下を参照：「新加坡車商公会ホームページ」<http://www.autoparts.com.sg/>

<sup>15</sup> 現在の業縁組織は、方言の衰退などによって地縁的な色彩は薄れてはいるものの、一部の職種 (質屋など) はなおも 9 割以上が、同じ方言グループによって独占されている。

<sup>16</sup> 当時の華人移民の形態は、大きく 2 つに分けられる。1 つは、現地で建設業などの労働に従事するために、渡ってきた「苦力」と呼ばれた人々である。「苦力」には、自費で渡ってきた者、知人や仲介者などから借金をして渡ってきた者、中には騙されて連れて来られた者もいた。現地の雇い主は、彼らに簡易住居および食事を提供した。労働は過酷であり、病気になったり命を落としたりする人もいた。もう 1 つは、自由に職を探した人々である。先に現地に渡航している親族や同郷人を頼って渡航してから、職を探す「連鎖移民」、渡航費を工面して個人で渡航して職を探す「流寓」などである。渡航後、現地の会館を利用する移民は、主に、後者の「連鎖移民」や「流寓」が多かった。詳細は以下を参照：潘翎主編『海外華人百科全書』、三聯書店、1998 年、60-61 頁。

<sup>17</sup> 当時は、中国の故郷に遺体を移送する業務も行われていたが、その一方で、現地で墓地を購入し、メンバーのために埋葬業務も行う会館もあった。例えば、応和会館は、雙龍山に墓地を所有しており (詳細は以下を参照：呉龍雲、洪燕燕、潘慧珠「新加坡客家會館 (上篇)：応和会館、惠州会館、広西暨高州会館」、黄賢強編『新加坡客家』、広州師範大学出版社、2008 年、33、40 頁)、三山会館は、三江公墓という墓地を所有していた (詳細は以下を参照：呉華『新加坡華族會館志 第一冊』、南洋學會出版、1975 年、4 頁)。

<sup>18</sup> 筆者は、華人会館の要職に就く成功した華人企業家について、「象徴資本」という視点から分析を行った。詳細は以下を参照：合田美穂「シンガポール華人企業家にみられる象徴資本－黄祖耀を例として－」、『社会学研究』 (甲南女子大学大学院論文集・第 19 号) 2001 年 3 月。

<sup>19</sup> 合田美穂「宗郷会館と華人企業家」：<http://news.nna.jp.edgesuite.net/free/mujin/copi/copi10.html>



進め、慈善教育公益事業を行うことを目的とする」<sup>20</sup> (南洋客属総会)、「本館は、交流を図り、情報を交換し、相互扶助を行い、福利と社会公益を推し進めることを目的とする」<sup>21</sup> (新加坡瓊州会館)、「同郷人との親睦を深め、公益のために相互扶助を行い、教育を推進することを目的とする」<sup>22</sup> (新加坡潮州八邑会館) などである。

華人会館は、特に 19 世紀末期から 20 世紀初期にかけて、華人社会に必要とされた学校、病院などを設立し、教育、就労、福利厚生といった面で、メンバーおよびその家族の生活を全面的にサポートし、英国植民地政府に代わって華人社会を支え、華人社会の中で不可欠な存在として機能してきた。華人会館は、第 2 次世界大戦中、機能を一時停止させたものの、戦後になると、メンバーに対する教育、医療、就労、祭祀、冠婚葬祭業務を再開させ、華人社会のなかで、ふたたび重要な役割を担うようになった。

筆者が、19 世紀末期から 20 世紀初期にかけての華人会館の役割の中で、最も重要な役割の 1 つであると考えているのは教育事業である。当時シンガポールおよびマレーシアでは、イギリス植民地政府は、民族言語教育への支援には無関心であり、また、強い排斥政策を行うこともなかったため、その自由な空間のなかで、華人会館や華人企業家が積極的に華文学校を設立していった<sup>23</sup>。例えば、シンガポールの場合は、1905 年から 1920 年にかけての間に、華文学校が 36 校設立された。当時設立された華文学校は、ほぼすべてが、方言を教育媒介言語としており、華人会館によって設立された多くの華文学校も同様であった<sup>24</sup>。方言グループを基本とした華人社会が形成されていったのである。

1920 年代以降は、華語教育が普及し、教育媒介語は方言から、華語に移行していくことになった<sup>25</sup>。これら華文学校は、シンガポールおよびマレーシアの華人社会を支える人材を育成するための重要な存在とな

り、且つ、中華文化の継承および華人アイデンティティの涵養に大きな役割を果たすことになった。そして、華人社会は、華語を媒介語として、各方言グループから、1 つの華人社会としてまとまるようになっていくのである。その過程で、華人会館と華文学校は常に密接な関係を保っていた。

### 3. 華人会館の弱体化

#### (1) シンガポール：華人会館の役割の減少

1959 年、シンガポールが英国から自治権を獲得してからは、華人会館を取り巻く環境が大きく変わりはじめた。1965 年のシンガポール独立以降、華人会館がこれまで担っていた役割を、政府が全面的に担うようになるのである。

当時、シンガポール政府が積極的に推進した HDB 住宅 (公共住宅) の建設と土地開発によって、方言群による華人の住み分けが解体されたことも、華人会館の弱体化の大きな要因であった。HDB 住宅が建設された新しい人口集中地区には、華人会館が新たに設立されることはなかった。政府は、そういった地区には、積極的にコミュニティ・センターを設立し、多民族からなる居住者に対して、居住地への愛着心を植えつけることに力を費やしたのであった<sup>26</sup>。

また、独立直後のシンガポールでは、反共産政策を掲げていた周辺諸国から、「中国色の強い国家」であると周囲からみなされることを避けるために、できるだけ華人色を排除し、シンガポール人としての国家アイデンティティの創造および国民統合を推し進めなければならなかった<sup>27</sup>。政府にとっては、華人会館を含めた各民族グループの組織による活動は、政府の政策の大きな障害になると考えられるようになっていたため、華人会館の活動を支援するような政策を、政府は一切採ることはなかった。

このような背景から、1960 年代以降、華人会館の

<sup>20</sup> 南洋客属総会「南洋客属総会章程」、『南洋客属総会第三十五至三十六周年特刊』、南洋客属総会、1967 年、201 頁。

<sup>21</sup> 新加坡瓊州会館「新加坡瓊州会館天后宮大廈落成紀念特刊」、新加坡瓊州会館、1965 年、87 頁。

<sup>22</sup> 新加坡潮州八邑会館「潮州八邑会館章程」、『新加坡潮州八邑会館四十周年紀念特刊』、新加坡潮州八邑会館、1969 年、199 頁。

<sup>23</sup> 合田美穂「新加坡與香港的福建社團及其教育事業的比較」、『亞洲文化』2007 年第 31 期、161 頁。

<sup>24</sup> 例えば、客家系の「応和会館」および「茶陽会館」がそれぞれ設立した「応新学校 (1905 年設立)」および「啓發学校 (1906 年設立)」は、教育媒介言語が客家語であり、「海南会館」が設立した「育英学校 (1910 年設立)」は、教育媒介言語が海南語であり、「福建会館」が設立した「道南学校 (1906 年設立)」や「崇福学校 (1907 年設立)」は、教育媒介言語が福建語であった。詳細は以下を参照：鄭良樹『馬來西亞華文教育史』、第 1 分冊、1998 年、162 頁。

<sup>25</sup> 湯鋒旺「二戰前新加坡華人“會館辦學”研究」、『東南亞研究』、2012 年第 4 期、4 頁。

<sup>26</sup> 合田美穂「新加坡與香港的福建社團及其教育事業的比較」、『亞洲文化』2007 年第 31 期、12 頁。

<sup>27</sup> 曾玲「社会変遷與当代新加坡華人宗郷社團的轉型與發展」、李元瑾編『新馬印華人族群關係與国家建構』、新加坡亞洲研究学会、2006 年、84 頁。

存在価値は、次第に低くなり、華人会館は、とりわけ若い会員を獲得することに困難を極め、弱体化していったのである<sup>28</sup>。シンガポール政府は、華人を含めたすべての国民を保護するため、そして、国民の権益を守るために、数々の新しい政策を打ち出していった。それによって、華人社会の支柱となっていた華人会館が弱体化していくのは自然な流れであった。

1957年に新教育法が施行されてからは、多数の華文学校が政府の公立学校へと移行されることとなった。華人会館が運営していた学校も同様であり、華人会館の学校に対する影響力は弱まっていった<sup>29</sup>。更に、1984年から、華文、マレー語、タミル語の民族言語が、英語を第1言語とする2言語教育体系の中に組み込まれることとなり、1987年に、華文学校と英文学校が完全に統合され、華文学校が消滅することになったのである。それ以降、シンガポール政府が積極的に推進した英語を第1言語とする2言語教育によって、若い世代の華人は英語を好んで使用するようになった。英語運用能力が高い者が、シンガポールでの就職や進学において、より有利になり、若い世代の英語化が加速されていった。若い世代の華人は、次第に、華語ならびに華人文化に対して、一世代前の華人のように強い関心を持たなくなっていったのである<sup>30</sup>。

また、1980年代から始まった「スピーク・マンダリン・キャンペーン（講華語運動）」によって、方言を話さずに華語を話すことが奨励されるようになった。当時まだ多くの華人家庭で使用されていた方言は、初等教育において英語と華語の2言語を学習することへの障害になると考えられたからである。「スピーク・マンダリン・キャンペーン」開始後、広東語による香港映画は、華語による吹き替えに変わり、テレビやラジオからも方言が姿が消えた。その後、方言を話せない若者が増加した。そして、方言文化の色彩が強い華人会館（特に地縁会館）に対して、関心や親近感を持つ若者も減っていった<sup>31</sup>。そういった変化によって、人々の華人会館に対する関心や興味も、更に自然と薄らいでいくことになった。

「シンガポールで生まれ育った華人の人生観、世界

観、そして、活動空間に至って、すべて、地縁・血縁組織の限界を超えている」と、歴史学者である林孝勝がいうように、現在のシンガポール華人にとって、華人会館はもはや重要な存在ではなくなっていったのである。

## (2) マレーシア：新経済政策の影響による華人会館への影響

一方、マレーシアでは、英国からの独立後、シンガポールのように、政府によって、華人の住み分けが解体されることも、多民族が共有できるコミュニティ・センターのような機関を設立することも、中国方言を遮断するような政策が施行されることもなかったが、華人社会全体が、マレーシア政府の新経済政策によって大きな影響を受けることとなった。

新経済政策とは、1971年から1990年までの20年間にわたって実施された、先住民を含めたマレー人社会の経済的および社会的権益を擁護することを目的とした政策である。新経済政策では、具体的に、マレー人の経済的地位の向上、マレー人の公務員、産業、専門職への就業機会の拡大、マレーシア全体の各民族集団別人口構成比率を産業別および職種別構成比率に反映させること、マレー人の経営者育成が主な目標とされた。

新経済政策実施後、マレーシアの国民の生活は確実に向上した。例えば、平均国民収入は、1970年の390米ドルから、1989年の2130米ドルへと増加し、千人当たりのテレビの所有率は、それぞれ、1970年の22台から、1989年の100台へ、同電話の所有率は、1970年の1台から、1989年の9.7台へと増加した。先住民を含むマレー人と、非マレー人との間の貧富の差も縮小され、特にマレー人の貧困率は下降した。例えば、マレー人の貧困率は、1970年の56.4%から、1990年の23.8%へ、特に中部および西部マレーシアのマレー人の貧困率は、1970年の65%から1990年の20.8%へと減少が見られるなど、明らかな効果が見られた。

この政策によって、華人社会における利益は損なわ

<sup>28</sup> 曾玲「社会変遷與当代新加坡華人宗郷社团的轉型與發展」、李元瑾編『新馬印華人族群關係與国家建構』、新加坡亞洲研究学会、2006年、84頁。

<sup>29</sup> 合田美穂「新加坡與香港的福建社團及其教育事業的比較」、『亞洲文化』2007年第31期、4頁。

<sup>30</sup> 曾玲「社会変遷與当代新加坡華人宗郷社团的轉型與發展」、李元瑾編『新馬印華人族群關係與国家建構』、新加坡亞洲研究学会、2006年、84頁。

<sup>31</sup> 当時の言語政策については以下を参照：合田美穂「中国語教育の比較文化論：シンガポールと香港を例として」、『甲南女子大学大学院論集 人間科学研究編』第2号、2004年3月、および、合田美穂「シンガポールと香港における福建組織の教育事業の比較研究」、日中社会学会編『日中社会学研究』第12号、2005年3月。

れることになった。マレー人を優遇することによって華人による経済活動は打撃を受け、特に華人の個人投資は大幅に減少したのである。影響を受けたのは華人経済だけではなく、千社を超える国営企業も、管理経験のないマレー人の管理職によって、その運営に悪影響が及んだ。その結果、1990 年代後半以降、多くの国営企業が民営化されることになったのである。

新経済政策は、マレー人の資産階級を作り出すことになったが、彼らは、多くの企業の役員職を兼ねるようになった<sup>32</sup>。華人社会において、経済的に成功した華人の多くは、華人会館の中で要職に就き、華人会館を経済的に支えてきたということを上述したが、華人会館を支えることができる華人企業家は従来よりも減少し、華人会館の影響力や経済力も衰退することにもつながった。

華文教育機関も打撃を受けた。国民型華文小学校（主な教学媒介語は華語、マレー語および英語は必修科目）は、従来は、国家の助成を得て成り立っていた。しかしながら、新経済政策下のマレー人優遇政策によって、国民学校（主な教学媒介語はマレー語）に対する政府の支援が集中することになり、国民学校卒業生の中等および高等教育機関進学への優遇が行われるようになった。その結果、国民型華文小学校と国民学校への支援との間には、大きな差が生じるようになった。

例えば、1984 年の国民型華文小学校に在籍する小学生の割合は、全国の小学生の 27.3%であったが、国民型華文小学校が政府から得られる補助金は、全国の小学校全体の 3.4%のみにとどまった。この結果、国民型華文小学校の設備、教師、教材は常に不足状態となり、在籍する華人の小学生により良い学習環境を提供することに困難を極めたのである。

高等教育においても、マレー系と非マレー系との間に差が生じるようになった。高等教育機関への入学条件は、マレー人に有利なものへと変わり、華人の国立大学への入学機会が減少した。例えば、マラヤ大学を含めた 3 つの国立大学への入学者における華人の割合は、1970 年の 48.9%から、1980 年の 26.5%へと激減し、

同時期のマレー人の割合は、40.2%から 66.2%へと増加した<sup>33</sup>。

マレーシア各地域にある私立の独立中学、およびシンガポールに 1956 年に設立された南洋大学（ともに華文が主要な教学媒介語）の卒業資格に対しても、マレーシア政府は承認することはなかった。それは現在も同様である<sup>34</sup>。華人会館が支援してきた華文学校の卒業生の、マレーシアにおける活路が見いだせなくなったことと、華人会館の役割低下は、当時の華人社会の様相を表すものである。

#### 4. 華人会館の転機：全国区機構の誕生

##### (1) シンガポール：「新加坡宗郷会館聯合總會」の設立

シンガポールの華人会館に転機が訪れたのは、1986 年である。1985 年、主な華人会館の代表者が会議を開き、華人会館の組織力および社会への影響力を強化するために、各華人会館を統括する全国的な組織を成立させる方針を打ち出した。翌年、オン・テンジョン第 2 副首相（当時）の支持を得て、127 の華人会館の賛同の下で、華人伝統文化の継承および発揚、政府と華人社会との間における架け橋としての任務の遂行、華人会館の組織力の強化を目的とする「新加坡宗郷会館聯合總會」が設立された<sup>35</sup>。

独立後のシンガポールでは、国民統合のために、各民族グループによる活動が抑えられてきた。とりわけ、華人に対しては、「中国色」を排除する政策がとられてきた。しかし、1980 年代以降は、様相が変容していく。「各民族グループが自らの文化やルーツを知ることこそが、国民統合の重要なカギになる」という考え方が、政府によって語られるようになり、華人会館の存在価値があらためて見直されるようになったのである。

その後の 10 年間、「新加坡宗郷会館聯合總會」の主導の下で、各華人会館は、活動を徐々に活性化させていった。例えば、華人伝統行事に関するイベントの開催（2014 年秋季の場合は、符氏社や新加坡客

<sup>32</sup> 曹雲華「試論馬來西亞的“新經濟政策”——從華人與原住民關係的角度進行分析」、『東南亞縱橫』、1998 年。

<sup>33</sup> 林勇『新經濟政策與馬來西亞華人馬來人經濟地位的變化』、福建社會科學院、2011 年。

<sup>34</sup> 南洋大学設立に際しては、華人企業家、華人会館だけではなく、一般の華人労働者たちも賛同し、シンガポールとマレーシアだけではなく、東南アジア各地から多額の寄付金が集まった。シンガポール福建会館では、華人企業家である陳六使が頻繁に南洋大学設立についての会議を開いた。南洋大学の広大な土地も、シンガポール福建会館の寄贈によるものである。南洋大学設立に際しての、福建会館をはじめとする華人会館の貢献は非常に大きいものであった。

<sup>35</sup> 曾玲「社会変遷與当代新加坡華人宗郷社團的轉型與發展」、李元瑾編『新馬印華人族群關係與国家建構』、新加坡亞洲研究学会、2006 年、86 - 87 頁。

「新加坡宗郷会館聯合總會」についての詳細は、以下を参照：<http://www.sfcca.sg/>



属黄氏公会が、伝統的な秋祭を実施)、後継者育成のための青年団の設立(2013年現在では、宗郷会館聯合総会および31の華人会館に、青年団が設立されている)、華人文芸活動活性化のためのダンス部の設立(岡州会館楽劇部<sup>36</sup>など)、合唱団の設立(南洋客属総会合唱団<sup>37</sup>など)、ドラゴンダンス部の編成(鶴山会館国術醒獅団<sup>38</sup>や岡州会館舞獅国術部など)、中国地域食文化の伝播のための食文化講座(2014年の場合は、「潮州美食講座」<sup>39</sup>など)、華人文化についての理解を深めるための学術セミナーの開催(2014年秋季の場合は、宗郷会館聯合総会主催の「関公(関羽)文化講座」<sup>40</sup>など)である。

「新加坡宗郷会館聯合総会」は、上述の諸活動以外にも、南洋理工大学内に研究機関の「華裔館」<sup>41</sup>を設立したり、季刊誌『源』および月刊リーフレット『宗郷簡訊』を発行したりしている。そして、「宗郷会館聯合総会」成立時には70であった団体会員数は、2000年初期には2百近くになり、現在では3百以上にまで増加した。

1957年に新教育法が施行され、多数の私立の華文学校が政府の公立学校へと移行されることとなったことは上述したが、華人会館は、「華人文化の保存と継承」という形で、華人会館が設立した旧華文学校とは、なおも関係を保っている。華人会館が設立した旧華文学校に対して、華人会館は、伝統行事に関する活動の開催、奨学金の授与などを中心に、継続して手厚い支援を行っている。また、学校の理事には、華人会館の理事が名を連ねているケースも多い<sup>42</sup>。初等教育においても、旧華人会館系の学校は、伝統的な校風、華人社会からの支援の手厚さなどから、現在でも人気が高い<sup>43</sup>。

政府は、1980年代後半から、第2言語である民族言語の重要性を打ち出した。中等教育においては、伝統的な旧華文学校を「特選学校」として制定し、華

語を英語とともに第1言語として履修させることとなった。リー・シェンロン首相も、「特選学校」の卒業生であり、華語も堪能である。こういった「2言語エリート」を育成するのも「特選学校」の重要な役割となっている。「特選学校」の一部は、現在も華人会館からの支援を得ている。華人会館は、かつてのように直接学校運営に関わることはなくなったが、このような形で、シンガポールの教育に貢献し続けている。

## (2) マレーシア：「馬來西亞中華大会堂総会」の設立

マレーシアでも、シンガポールの「新加坡宗郷会館聯合総会」と時期を同じくする1982年9月に、華人会館の全国規模組織である「馬來西亞中華大会堂総会(通称「華総」)」の前身である「馬來西亞中華大会堂聯合会(通称「堂聯」)」の設立が、セランゴール州の「雪蘭莪中華大会堂」によって発起された。当時のマレーシアの各州には、州内の華人会館をまとめる組織(名称は「中華大会堂」、「華人大會堂」、「中華総会」、「華人社団聯合会」、「華人社団聯合総会」など)があったが、華人会館を取りまとめる全国的な組織は存在していなかった。

「雪蘭莪中華大会堂」の呼びかけに応じて、各州の中華大会堂などの組織が賛同し、「馬來西亞中華大会堂聯合会」が設立されることになった。1983年2月に、政府に組織の登録申請を行い、1991年10月17日によりやく承認され、同年12月13日に開催された第1回の全国代表大会会場において、正式に成立が宣告されたのである。シンガポールの「新加坡宗郷会館聯合総会」が、オン・テンション第2副首相(当時)の支持を得て、発起の翌年に成立したのに対し、マレーシアの「馬來西亞中華大会堂聯合会」は、政府からの支持や支援を得ることもなく、正式に承認されるまで、8年もの年月を要した。発起から成立ま

<sup>36</sup> 岡州会館楽劇部は、1947年に組織されて現在に至っている。最近の活動は以下を参照：<http://www.chinanews.com/hr/2013/11-04/5458203.shtml>

<sup>37</sup> 南洋客属総会合唱団は、1987年に設立された。2004年以降、国内外でのコンクールにおいて、入賞を重ねている。例えば、2006年のシンガポール国際合唱コンクールにて金賞、2009年にも同コンクールで特別金賞、2010年の北京国際合唱コンクール高齢者の部で金賞を得ている。詳細は以下を参照：<http://www.sfcca.sg/node/1069>

<sup>38</sup> 鶴山会館国術醒獅団の歴史は古く、1920年に設立された。詳細は以下を参照：<http://sghoksan-cl.blogspot.hk/p/blog-page.html>

<sup>39</sup> 「潮州美食講座」の詳細は以下を参照：<http://www.sfcca.sg/node/1308>

<sup>40</sup> 「関公文化講座」の詳細は以下を参照：<http://www.sfcca.sg/node/1377>

<sup>41</sup> 「華裔館」の詳細は以下を参照：<http://chc.ntu.edu.sg/Pages/index.aspx>

<sup>42</sup> 筆者は、こういった理事について、「象徴資本」という見方から分析を行った。詳細は以下を参照：合田美穂「シンガポール華人企業家にみられる象徴資本－黄祖耀を例として－」、甲南女子大学大学院論文集、『社会学研究』第19号、2001年3月。

<sup>43</sup> 筆者の福建系会館関係者への聞き取りによると、一部の旧会館系の小学校では、会員の子女の優先入学枠があり、そのために会員になる若い親もいるほどであるという。

での時間だけをみても、マレーシア当局の華人会館に対する態度を認識することができる。

1997 年には、その名称を「馬來西亞中華大会堂総会」と改称し、マレーシアの 13 の州<sup>44</sup>にある中華大会堂のさらなる上層機構として、華人社会、経済、文教など各方面においての最高機関として作用することになった。2005 年 12 月現在における、マレーシアに登録されている華人会館は八千近くに及び、その大部分が 13 州の中華大会堂<sup>45</sup>の団体会員となっている。「馬來西亞中華大会堂総会」はそれらの上層機関となったのである。

「馬來西亞中華大会堂総会」および各州の中華大会堂は、社会、経済、文教といった各領域において、地縁、血縁、業縁、同窓会、文教、青年、慈善、体育、宗教などからなる組織も会務の職務の範囲としている。「馬來西亞中華大会堂総会」の主旨は、「我が国の各民族の親善と団結を図る。会員に関する問題を協議し対応する。会員に影響をおよぼす政府の政策または措置に対して意見を提出する。連邦の憲法の原則に合う形で、文教、福祉、社会及び経済活動を推進し参与する。本会の主旨を同じくする団体と連絡を取り合い、上述の目標を達成すること」である<sup>46</sup>。一番目の主旨が「我が国の各民族の親善と団結を図る」であるということからも、民族問題に敏感なマレーシアの国情が反映されていることが分かる。

「馬來西亞中華大会堂総会」は、中華文化の推進においても大きな力を発揮している。1984 年以降、「馬來西亞中華大会堂総会」の主催で、各州の中華大会堂が持ち回りで、全国規模の華人文化フェスティバルを開催している。その主要目的の 1 つは、他民族に華人文化を理解してもらうことである。また、1985 年に、

華人社会に関する重要な資料を保管する「華社資料研究中心 (1996 年に「華社研究中心」に改名) を設立し、不定期で研究書を出版したり、セミナーを開催したりしている。筆者は、1990 年代に何度か「華社研究中心」を訪れたことがあるが、会員ではなくても自由に利用することができ、市民に開放されている。

また、業縁に相当する組織で、マレーシアの華文教育において非常に重要な働きをしてきた組織に、「董教総」がある。「馬來西亞華校董事聯合会総会 (通称「董総」)」<sup>47</sup> および「馬來西亞華校教師会総会 (通称「教総」)」<sup>48</sup> の連合体が「董教総」であり、マレーシアの華文教育の推進と発展に寄与してきた。全国の国民型華文小学校および私立の華文独立中学の役員会および教師会は、それぞれが各州の「董総」および「教総」に加入している。

「董教総」は、1973 年に、私立の華文独立中学の運営に関わる「董教総独中工委会」を、1994 年には、国民型華文小学校の運営に関わる「董教総華小工委会」をそれぞれ成立させている。注目に値するのが、同時期の 1994 年、「董教総聯合独立大学有限公司」が、「董教総教育中心 (非営利) 有限公司」という会社を設立し、その「董教総教育中心 (非営利) 有限公司」によって、1997 年に、高等教育機関である私立の「新紀元学院」が創立されたことである。これまで、全国各地における華文小学校、華文中学校の運営と権益のために力を注いできた「董教総」が、全国区の高等教育機関を設立するために非営利の有限会社を設立したことは非常に興味深いことである。

現在、マレーシアでは、マレー人優遇の教育政策が実施されており、華文教育の発展が制限されてはいるものの、華人会館や「董教総」の支援の下で、現在、

<sup>44</sup> ジョホール州 (マレー語: Johor Darul Takzim)、ケダ州 (マレー語: Kedah Darul Aman)、クランタン州 (マレー語: Kelantan Darul Naim)、ムラカ (マラッカ) 州 (マレー語: Melaka Bandaraya Bersejarah、英語: Malacca)、ヌグリ・スンビラン州 (マレー語: Negeri Sembilan Darul Khusus)、パハン州 (マレー語: Pahang Darul Makmur)、ペナン州 (マレー語: Pulau Pinang Pulau Mutiara)、ペラ州 (マレー語: Perak Darul Ridzuan)、プルリス州 (マレー語: Perlis Indera Kayangan)、セランゴール州 (マレー語: Selangor Darul Ehsan)、トレンガヌ州 (マレー語: Terengganu Darul Iman)、サバ州 (マレー語: Sabah Negeri Di Bawah Bayu)、サラワク州 (マレー語: Sarawak Bumi Kenyalang)。その他、連邦直轄領 (マレー語: Wilayah Persekutuan、英語: Federal Territory) には、首都であるクアラルンプール (マレー語: Kuala Lumpur)、そして、ラプアン (マレー語: Labuan)、行政上の中心都市であるプトラジャヤ (マレー語: Putrajaya) がある。

<sup>45</sup> 13 州を代表する中華大会堂は以下のとおりである: プルリス州の「玻璃市華人大會堂」、ケダ州の「吉打州華人大會堂」、ペナン州の「檳城華人大會堂」、ペラ州の「霹靂中華大會堂」、クアラルンプールおよびセランゴール州の「吉隆坡暨雪蘭莪中華大會堂」、ヌグリ・スンビラン州の「森美蘭中華大會堂」、ムラカ (マラッカ) 州の「馬六甲中華大會堂」、ジョホール州の「柔佛州中華總會」、パハン州の「彭亨華人社團聯合會」、トレンガヌ州の「登嘉樓中華大會堂」、クランタン州の「吉蘭丹中華大會堂」、サラワク州の「砂拉越華人社團聯合總會」、サバ州の「沙巴中華大會堂」。

<sup>46</sup> 「馬來西亞華人中華大會堂」についての詳細は以下を参照: [http://www.huazong.my/chinese\\_association](http://www.huazong.my/chinese_association)

<sup>47</sup> 「馬來西亞華校董事聯合會總會 (通称「董総」)」についての詳細は以下を参照: <http://www.dongzong.my/index.php>

<sup>48</sup> 「馬來西亞華校教師會總會 (通称「教総」)」についての詳細は以下を参照 <http://web.jiaozong.org.my/>



全国各地に 1200 校近い国民型華文小学校、60 校の独立中学、4 校の高等教育機関（ラーマン学院<sup>49</sup>、南方学院、新紀元学院、韓江学院）が運営されている。現行の教育法令では、華文学校は政府から運営に際して補助金を満額で受け取ることができないため、華人組織からの寄付金、華人組織を通して得た募金に頼らざるを得ない状況である。貧困家庭の児童並びに生徒は、多くの華人会館から奨学金などの援助を得て学ぶことが可能となっている<sup>50</sup>。「董教総」は、マレーシアの華文教育の発展に欠かせない組織なのである。

## 5. 青年団の出現：「伝統」と「脱伝統」の活動を展開

華人会館の活性化は、華人文化の継承や発揚を考える意味でも、喜ばしいことである。一時的に衰退していた華人会館の苦境を思い、現在の活性化を喜ぶ会館関係者も多い。しかしながら、これまでと同様に、若者の華人会館離れ、後継者問題といった問題は潜在している。筆者は、華人会館において、より多くの若者の参加を得るための活動の企画に関わった 2 人の会館関係者に聞き取りを行った。

筆者が聞き取りを行った、シンガポールの華人会館のメンバー A さん<sup>51</sup> は、1980 年から 1990 年代にかけて、2 つの会館のメンバーを兼ねており、会館の活動の企画に積極的に関わっていた。1986 に「新加坡宗郷会館聯合總會」が成立し、華人会館の活性化の後押しとなったことに勇気づけられ、A さんは自らが所属する 2 つの会館で、多くの活動を積極的に企画するようになった。

A さんは、当時 10 年間、青年団の設立、伝統行事に関連するイベントの企画などを実施してきた。シンガポールでは、現在でこそ、30 以上の青年団が華人会館において設立されているものの、当時は A さんが所属する会館の青年団が、さきがけ的な存在の 1 つであった。華人会館では、著名な華人企業家が会長や

理事などを務めているケースが多い。普段の生活において、なかなかそういった企業家と面識を持つ機会がない若い華人が、青年団に加入することで、会館に所属する華人企業家と交流する機会を提供できるようにしたのである。その結果、30～40 代を中心とする華人が青年団に加入したという。「ビジネスの世界で活躍する著名な華人企業家との交流は、一般の社会活動ではめったに得られない、華人会館ならではのメリットである」と A さんは考えていた。

A さんが企画したイベントは、華人の伝統行事に関連したものが多くことも特徴的であった。例えば伝統行事と若者を結びつけた「中秋節の月見パーティー」、「重陽節のハイキング」、「新春華語歌唱コンテスト」などである。「伝統と現代化の融合」として、メディアに取り上げられたこともあった。

一方、シンガポールの別の華人会館のメンバーである B さん<sup>52</sup> も、1990 年代、所属する 3 つの会館の活動に積極的に関わっていた。B さんが所属する会館は、建物が比較的大きく、資金も潤沢で、会館内部の設備も整っていた。B さんも A さんと同様に、会館の活性化、特に若者の参加を強く希望しており、ボランティアで熱心に活動を企画した。

B さんは、会館の幹部と交渉して、若い世代の参加を目的として、会館の設備をフルに活用した現代的なイベントを、他の会館に先駆けて企画した。「カラオケ大会」、「クリスマス・ダンス・パーティー」などが代表的な活動である。若者が興味を持ちそうな企画にしたこと、参加費を無料にしたこと、非会員のイベント参加も認めたことなどから、若い世代の参加者は予想を上回ったという。その後、多くの他の会館も、B さんの企画に類似する現代的な活動を行うようになった。

前者の A さんは、「伝統行事」または「会館ならではの特色」にこだわったために（例えば、クリスマス・パーティーといった企画は行わなかった）、大幅な参加者を得ることはできなかった。会館の他メンバーからは、「もっと若者を獲得するために、伝統にこだわらず、若者を引き付ける現代的な企画をしたほうがい

<sup>49</sup> 中でもラーマン学院（正式名称：Tunku Abdul Rahman College）の設立の背景は、他の高等教育機関と異なっている。ラーマン学院は、1969 年 2 月 24 日に、華人政党である馬華公会が中心になって設立した高等教育機関である。学校名は、マレーシアの初代首相であるトゥンク・アブドル・ラーマンから採ったものであり、主な教育媒介語は英語であるが、課程によっては華語やマレー語も使用される。運営費用の半分は政府からの補助が得られているため、他の華人組織が設立した高等教育機関に比べると設備も整っており、学費も安い。

<sup>50</sup> 潘翎主編、崔貴強編訳『海外華人百科全書』、三聯書店、1998 年、179 頁。

<sup>51</sup> A さん（匿名希望）は、インタビューした 2007 年当時、50 代前半、男性である。

<sup>52</sup> B さん（匿名希望）は、インタビューした 2007 年当時、50 代後半、男性である。

い」と提案されたこともあったという。

A さんは、「中国の地方に伝わる伝統的なグルメ・フェスティバル」「中国将棋大会」などといった、伝統や中国と関係がある企画をすれば、参加者は興味のある人や当事者に限られてしまい、若者の大量参加は期待できないことは承知していたが、他の会館と差別化のないイベントや、会館や伝統行事とは無関係のイベントを企画すれば、会館の意義がなくなってしまう。そこだけは譲りたくなかった」と強調した。

B さんが所属するような、設備が整った規模が大きな会館や、潤沢な資本を持つ会館は、無料でカラオケの設備を提供したり、広いラウンジで立食パーティーなどを企画したりすることも可能であり、若者をひきつけるような現代的なイベントを企画しやすい状況にある。B さんの考えは、A さんとは異なっていた。「クリスマス・パーティーは西洋の行事で会館行事としてふさわしくない」と高齢者のメンバーから苦言を呈されたこともあったというが、「どんな内容であろうと、より多くの若い人がイベントに参加してくれればいい。それで、最終的に、それをきっかけにして、会館というものに興味をもってくれる若者が、その中から出てくれればいい。」というのが B さんの考えであった。

シンガポール華人にとって、会館が必要不可欠な存在ではなくっている現在、後継者候補にもなりうる若者を、いかにして、より多く呼び込むかということは重要なポイントになってくる。実際に、華人伝統行事とは直接関係のない大きなイベントを企画して効果が表れているわけであるから、B さんがこの方法を勧めることも、他の会館が追随して同様の企画を行うことも理解できる。A さんのように「伝統」に矜持を持続けるか、B さんのように「脱伝統」で活性化を図るか、というのは、現在、会館が直面する問題でもある。また、「会館の後継者」、「将来の会館を背負って立つ人たち」という意味では、青年団の存在は非常に重要な存在となっている。現在、多くの会館（上述の A さんおよび B さんが所属しているいくつかの会館も含めて）では、多くのイベントの企画ならびに開催において、青年団が大きく関わっている。会館が「伝統」に重きを置き続けるにしても、「脱伝統」を図るにしても、今後、青年団の存在は華人会館にとって重要な存在であることに変わりはない。

マレーシアの華人会館においても、現在、青年団が存在感を発揮している。その中でも全国区的なものが、「馬來西亞中華大会堂総会青年団（通称「華総青」）」<sup>53</sup>である。「華総青」は、「馬來西亞中華大会堂総会」の傘下にある組織の 1 つであり、マレーシア各州の「中華大会堂」の青年団のメンバーが、「華総青」の理事を兼任する形となっている。「華総青」は、1992 年 1 月 16 日に設立され、全国各地の華人会館の青年団と連携を取り合い、会館の活性化に寄与している。

近年、各会館では、シンガポールと同様に、青年団が主催する多くの「伝統」並びに「脱伝統」の活動が展開されている。中でも、近年注目を浴びているのが、青年団の活動が活発なセラゴール州の「雪隆李氏宗親会」の動きである。例えば、2006 年 5 月 21 日に、「雪隆李氏宗親会」は、「力を合わせて、新しいチャンスを開拓する」というテーマで、新しい活動について議論するセミナーを開催し、現地の 36 の華人会館から 150 名の出席者を得た。その後、「雪隆李氏宗親会」は、組織の設備を電子化し、優れた製品やサービスなどを提供している企業や工場に与えられる品質マネジメントシステムである「ISO9001」の承認を獲得するなど、「脱伝統化」を図っている<sup>54</sup>。

## 6. 華人会館と政治（政治家）との関係

### (1) シンガポール：近年にみられる政治家の「公的」な関わり

独立後のシンガポールの華人会館は、政治に参与することはなく、現在も一貫してそのスタンスを貫いているが、政治家との交流はかねてより行われてきた。特に、近年、リー・クアンユー元首相が、華人会館の活動に参加する様子が、頻繁にメディアにて報道されるようになってきているが、それは、最近になってからのことではない。1990 年代以降、「新加坡宗郷会館聯合総会」や華人会館が主催する主要な行事の場に、国会議員が、時には首相や大統領などが「主賓」として出席することや、自らの父祖の地や姓を同じくする会館の「名誉顧問」として名を連ねることは、珍しくはなかった。リー・クアンユー元首相も、1990 年代にはすでに「李氏総会」の名誉顧問として名を連ねていた。

<sup>53</sup> 「馬來西亞中華大会堂総会青年団（通称「華総青」）」の詳細については以下を参照：[https://m.facebook.com/HuaZongQing/about?expand\\_all=1](https://m.facebook.com/HuaZongQing/about?expand_all=1)

<sup>54</sup> 「馬來西亞地縁性百年華團革新發展的經驗」：<http://hk.crnrt.com/crn-webapp/cbspub/secDetail.jsp?bookid=32601&secid=32624>

しかしながら、首相級の人物が、「主賓」や「名誉顧問」ではない形で、「公的」に会館に参加するようになったのは、最近になってからのことである。2011年8月、シンガポール建国46周年の祝宴が「新加坡宗郷会館聯合總會」において開催された際に、数名の閣僚とともに出席したリー・シェンロン首相は、総会設立25年目に際して、「新加坡宗郷会館聯合總會」の「初代賛助人」<sup>55</sup>となることを、初めて「公的に」宣言した。そして、「初めて、華人社会とともに手を取り、華人社会と政府との交流および協力関係を強いものとし、現地華人社会の団結と発展を促進し、華人文化を推進し、社会の凝集力を強化していきたい」と表明した<sup>56</sup>。

2012年1月、リー・シェンロン首相は、「新加坡宗郷会館聯合總會」および「通商中国」<sup>57</sup>によって開催された新年の式典において、「政府は、新加坡宗郷会館聯合總會がシンガポール華族文化センターの設立を計画していることに対して、支持し、応援していく」と正式に宣布した<sup>58</sup>。このように、華人会館は、政府関係者の支持を「公的に」得ることによって、「華人アイデンティティを支える組織」として、更にその存在がアピールされるようになっている。

## (2) 華人会館と華人政党「馬華公会」<sup>59</sup>の関係

一方、マレーシアの華人会館は、独立前の早い時期から、政党と強い関係を築いている。現在の聯合与党の一員でもある「馬華公会」の発起および成立に、多

くの華人会館が参与していた。「馬華公会」が成立したのは、1949年のことである。当時のマレーシアの華人社会では、華人の現地意識の高まりがみられるようになっていた。それまでは、華人の権益を守るための政党はなかった。マレー系政党に有利な動きが生じる中、英国植民地政府の勧めもあり、現地意識が強い華人を中心に、華人の権益を守るための政党を作る動きが起こった。そして、1949年2月に誕生したのが、「馬來亞華人公会（通称「馬華公会」、1963年に「馬來西亞華人公会」に改称）」である<sup>60</sup>。

「馬華公会」の初代会長である陳禎祿（タン・チェンロック）は英文教育を受けた現地生まれの華人であったが、「華人の権益を守る」とことと、そのために華人による政党を発起するという目的を持つことは、華文教育を受けた華人たちとは一致していた。1949年2月19日、セランゴール州の雪蘭莪中華大會堂にて、華人会館の代表者たちが集まり、議決で、「馬華公会」の成立に賛成した<sup>61</sup>。そして、1949年2月27日に、同じ中華大會堂において、立法議会の華人議員16人とともに、陳禎祿が、「馬華公会」を発足させることになったのである。

マレーシアではその後、華人が参与する政党がいくつも出現しているが、華人のみによって組織されている政党は「馬華公会」のみである。華人会館の賛同の下で設立したという背景や、華人のみによって組織されている政党であるという点から、現在でも多くの華

<sup>55</sup> 中国語の「賛助人」とは、一般的には経済的な支援者のことを指し、いわゆるパトロンと同義語である。しかし、リー・シェンロン首相が、実際に経済的な支援を行っているかどうかは定かではない。

<sup>56</sup> 「リー・シェンロン首相の談話」についての詳細は、以下を参照：<http://www.sfcca.sg/node/393>

<sup>57</sup> 「通商中国」は、2007年11月にリー・クアンユー上級相（当時）が、中国の温家宝首相（当時）の提案を受けて、正式に運営が開始された。その目的は、「通商中国」が、華文・華語を基本的な交流の媒介語とし、シンガポールの多元文化の伝統を保持しながら、中国ならびに世界各地の文化および経済との懸け橋となることである。「通商中国」についての詳細は、以下を参照：<http://www.businesschina.org.sg/>

<sup>58</sup> 「華族文化センター」は、すでに着工されており、2014年9月末に着工儀式が執り行われた。「華族文化センター」の賛助人でもあるリー・シェンロン首相は、着工儀式でも主賓として招かれている。「華族文化センター」は、華人文化の保存、継承、発揚、ならびに、現地の華人文化の推進し、同時に、各民族グループ間の相互理解と和諧を促進することを目的としている。詳細は以下を参照：<http://www.sfcca.sg/node/1422>

<sup>59</sup> 「馬來西亞華人公会（通称：馬華公会）」の詳細については以下を参照：<http://www.mca.org.my/cn/>

<sup>60</sup> 潘翎主編、崔貴強編訳『海外華人百科全書』、三聯書店、1998年、176頁。

<sup>61</sup> 当日代表者が参加した華人会館は、以下の通りである：中華総商会、瓜雪中華商会、嘉慶会館、広東会館、雜貨行、瓜雪晨光社、加埔華僑俱樂部、醒鍾補爐職工会、高州会館総会、礦商俱樂部、惠州会館、人鏡慈善白話劇社、福州咖啡商業公会、中華百貨商公会、雪蘭莪福州会館、精武女子体育、雪蘭莪華僑進口商公会、永春会館、中馬中医師公会、會寧公所、商業職員公会、順德会館、雪華藥業公会、中山同郷会、雪華機商公会、中華匯業公会、友藝別墅、漁商行、中中俱樂部、廣肇会館、萬寧同郷会、理髮行、加影礦商公館、巴生中華商会、興安会館、華人機器工会、雪華咖啡茶業公会、福建会館、広西会館、茶陽会館、潮州八邑会館、潮州京因商行、惠安公会、工商俱樂部、洗衣行、晉賢俱樂部、自由車商会、慶同樂、三輪車工友会、赤溪公館、三水会館、李氏聯宗会、達慶行。

当時の馬華公会や華人会館については、以下に詳しい：石滄金「試析馬來西亞華人社會與祖國關係的演變以馬來西亞華人社團為例」、『華僑華人歴史研究』第二期、2006年6月。石滄金「新世紀馬來西亞華人社團發展動態分析」、『世界民族』2007年第一期。石滄金『馬來西亞華人社團史研究』、暨南大學、2003年。



人会館が、「馬華公会」を支援している。筆者は、1999 年 11 月から 12 月にかけての間、マラッカのいくつかの華人会館ならびに華人関係の組織の活動にて参与観察を行った。そのうちの 1 つが、「馬華公会マラッカ市区会」の主催による政治座談会である。会場はマラッカの興安会館が提供していた。「馬華公会」が、雪蘭莪中華大會堂において、発起し成立したのと同様に、その後も、マレーシア各地で、「馬華公会」の諸活動が、華人会館において展開されていることから、「馬華公会」と華人会館はなおも密接に関わっていることがうかがえる。

## 7. 華人会館の「華人ネットワーク」構築

### (1) シンガポール：中国ならびに中国系新移民との「ネットワーク」の強化

近年、華人会館の活動に、新たな動きが見られるようになってきている。中でも、注目に値するのが、華人会館、中国および中国系新移民のつながりの強化である。1990 年代以降、シンガポールと中国の国交樹立、中国の改革開放政策にともなって、華人会館と中国との間では、ビジネスや人的交流を目的とした、交流団や視察団などによる交流が増加した。2009 年には、アジア太平洋経済協力会議でシンガポールを訪問していた胡錦濤国家主席が「宗郷会館聯合總會」に「正式に」招待された<sup>62</sup>。

近年は、文教方面における中国との関係も深まっている。例えば、「宗郷会館聯合總會」は、毎年、5 名の高校卒業生の中国著名大学への進学に際して、年間 1 万 5 千シンガポールドルの支援を 4 年間提供することになった。

中国系新移民の増加によって、近年、新移民による組織（中国からの移民による「天府会」、「山西会館」、「華源会」、「天津会」、および、香港からの移民による「九龍会」<sup>63</sup> など）が設立されるようになってきているが、華人会館はこれらの組織との交流も積極的に行うようになってきている。

「新加坡宗郷会館聯合總會」は、こういった新移民の組織に対してだけでなく、新移民個人のために、「新移民とシンガポール社会シリーズ」と呼ばれる講座やイベント（例えば、「シンガポール社会との関わり方を紹介する講座」、「シンガポール華人社会の行事である中元節を紹介する講座」、「他民族を紹介する講座」、「華人会館の人々との交流会」など）を定期的に開催するようになってきている<sup>64</sup>。

「新加坡宗郷会館聯合總會」は、2007 年から毎年、8 月の建国記念日に合わせて、「愛国歌曲大合唱」を開催している。当初は、主にシンガポール人が、この活動に参加していたが、近年は、新移民も招待されて参加するようになってきている。例えば、2011 年 8 月の「愛国歌曲大合唱」の場合は、19 の華人会館から代表およびパフォーマンス要員が派遣された。その他、新移民組織の「天府会」および「天津会」のメンバー、「福建会館」が設立した南僑中学および光華小学校の児童生徒合わせて、合計 4 百人近くが参加し、パフォーマンスを行った<sup>65</sup>。

その他、2013 年 4 月、「福建会館」が企画した「天福宮の見学会」に、150 人の新移民が招待され、シンガポールに根付く中国の地方文化に触れた。また、同年 7 月には、「岡州会館」が企画した「会館の文物展示会および地方劇の鑑賞会」に、新移民を含む 80 人が招待された<sup>66</sup>。

<sup>62</sup> 1990 年代、筆者は、中国の大使や領事などが招待されている華人会館のイベントに、何度か出席したことがある。また、1990 年代、シンガポールを公式訪問した中国の李鵬首相（当時）は、旧知の華人会館の主席に招待されて、会館関連のイベントに参加していた。しかし、こういった首相や大使などの会館への参加は、公的なものではなく、会館が私的に招待したものであった。

<sup>63</sup> 筆者は「九龍会」の成り立ちについての調査を実施した。詳細は以下を参照：合田美穂（共著）「シンガポールにおける日本人会と九龍会の比較」、中牧弘孜編『日本の社縁文化』、東方書店、2003 年 7 月。

<sup>64</sup> 最近では、2014 年 6 月に開催された、「シンガポール社会に溶け込むための講座」では、新移民がどのように現地社会に溶け込む方法、シンガポール人の新移民に対する見方などが、弁護士でもあり心理療法士でもある専門家によって解説された。該講座についての詳細は、以下を参照：<http://www.sfcca.sg/node/1397>

2013 年 10 月に開催された「シンガポール人の集団潜在意識を読み取る講座」では、心理療法士である専門家によって、シンガポールの多民族国家という背景や、シンガポール人の独特な思考についての紹介がなされた。該講座についての詳細は、以下を参照：<http://www.sfcca.sg/node/1258>

興味深い活動は、2014 年 4 月に開催された「シンガポールのインド族の歌舞風情」を紹介した講座である。ヒンズー教、ヒンズー教徒の習慣、神話、伝統行事などを、流暢な華語で紹介したのが、インド族である弁護士である。このように華語を流暢に話せる非華人が多いことも、多民族国家シンガポールならではである。詳細は以下を参照：<http://www.sfcca.sg/node/1362>

<sup>65</sup> 「愛国歌曲大合唱」の詳細は、以下を参照：<http://www.sfcca.sg/node/393>

<sup>66</sup> 司徒曉昕「新加坡多名新移民華人會館走透透 認識華族文化」、『聯合早報』、2013 年 11 月 4 日。

華人会館と新移民のつながりの強化が目立つようになった要因の1つには、リー・クアンユー元首相が、2011年に、「新加坡宗郷会館聯合總會」と「中華総商会」が主催するイベントに出席した際の提案がある。リー・クアンユー元首相は、「方言を話す若者が減っていく中で、シンガポールの華人会館、とりわけ方言グループに基づく同郷会館は、21世紀の時勢にかなうように変容しなければならない」、「新加坡宗郷会館聯合總會と中華総商会はともに、将来の役割について、あり方を見直さなければならない。同郷人や同姓の華人を支援するだけでなく、広東、福建、上海などから来た新移民が、シンガポールで仕事をする際に必要とされる英語を掌握するために力を貸し、新移民が順調にシンガポールに溶け込めるように支援しなければならない」と意見を述べた。そして、具体案として、「新加坡宗郷会館聯合總會と中華総商会はともに、政府と協力し合って、シンガポール全域にあるコミュニティ・クラブ、コミュニティ・センターにおいて、新移民のための英語コースを開催し、新移民に毎週2〜3時間の講義を受けさせるなどして、英語を掌握させるのはどうか」と提案した<sup>67</sup>。

近年、中国との関係の強まり、新移民の急増によって、華人会館の新移民に対する支援は、一層重要になるであろうと考えられる。中国からの新移民の多くが、シンガポールの言語環境のみならず、英文教育を受けてきたシンガポール人の思考方式、コミュニケーション方式に馴染めないといった話は、よく聞かれるため、こういった企画は非常に有用であると言える<sup>68</sup>。

19世紀後期から20世紀初期にかけて、中国から渡ってきたかつての移民が、華人会館を頼ったように、現在、新移民たちも新移民組織を頼る傾向がある。従来の華人会館が、新移民組織との「ネットワーク」を強化すること、そして、新移民がシンガポール社会に溶け込んでいけるような機会を提供することは、現在のシンガポールにとって、必要なことであろう。華人会

館がその役割を果たし、それによって活性化の機会が得られることは、一石二鳥であるといえる。

## (2) 華人会館を通しての華人企業家の影響力の強化

シンガポールやマレーシアの新聞（特にシンガポールの『聯合早報』、マレーシアの『星州日報』および『南洋商報』）の紙上には、宗郷会館関係者の叙勲や計報に際して、華人会館の会長や理事らの名前入りでメッセージが掲載されることがよくある。それら会館の会長の中には、シンガポールやマレーシアを代表する著名華人企業家の名が見られるが、華人会館と華人企業家は、現在においても密接な関係を保っている。

歴史的にも、著名華人企業家は、自分と関係する華人会館で主席あるいは会長と呼ばれる要職に就き、会館を核とする華人社会の中で、指導者として君臨してきたことは上述したが、その伝統は現在でも脈々と受け継がれている。例えば、シンガポールの場合、近年では、中華総商会の会長や役員を務めている著名企業家を見ても、黄祖耀（ウィー・チョーヨー）UOB銀行総裁が福建会館と金門会館、連瀛洲（リエン・インチョー）OUB銀行総裁が連氏公会、広東会館および潮州八邑会館、シムリムグループ総裁の孫炳炎（ソン・ベンヤム）が同安会館、中僑グループ総裁の林方華（リム・ファンホア）とインドネシアの政商として名が知られた林紹良（スドノ・サリム）が福清会館、マレーシア福華銀行役員である林理化（リン・リーホア）が福建会館と福州会館、シンガポール在住で中国政府との関係が深いといわれるインドネシアの政商、唐裕（トン・ジュー）は安溪会館——など、枚挙にいとまがない。

彼らは、自分の所属する華人会館に多額の寄付をし、それによって会館は、関係する学校への援助をはじめ、多種多様の活動を行うことができる。その一方で、彼らが会館の役職に就くことによって、同時に社会的名声を獲得し、自らの社会的影響力を強め、華人社会全体との「ネットワーク」を築いているのである<sup>69</sup>。

<sup>67</sup> 「リー・クアンユー元首相の談話」についての詳細は、以下を参照：<http://www.sfcca.sg/node/401>

<sup>68</sup> 1990年代後半、筆者は、新移民のCさん（匿名希望、インタビュー当時40代後半、男性、専門職として中国からシンガポールに移民）より、以下の話を聞いた：1990年代初期は、中国からの新移民は、専門職、高所得者、高学歴者が中心であり、人数もさほど多くはなかった。Cさんは、シンガポールへの移民当初、現地にあまり知り合いがおらず、交友関係を広めたい、出身地に縁を持つ人と知り合いになりたいという気持ちから、自らの中国の出身地と関係のある華人会館に、入会の意思を示した手紙を書いたが、返信がなかったという。Cさんは、「同郷人ならだれでも、華人会館に入会可能であると思っていたが、そうではなかったようだ。華人会館にとっての同郷人とは、かつてシンガポールに移民してシンガポールの礎を築いてきた人ならびにその子孫を指しており、新移民は含まれないのかもしれない」と語っていた。しかし、筆者の知るところでは、Cさんが入会の意思を示したという会館は、近年、新移民のための文化活動を支援している。この会館の変容も、リー・クアンユー元首相が、華人会館に対して、新移民を支援することを奨励したことで無関係ではないだろう。

<sup>69</sup> 合田美穂「宗郷会館と華人企業家」：<http://news.nna.jp.edgesuite.net/free/mujin/copi/copi10.html>

### (3) 国際的な「聯誼会」の出現：華人の世界的なネットワーク構築

1990 年代以降、華人会館の世界的な提携化が進み、「聯誼会」と呼ばれる大集会が、世界各地で開催されるようになってきている。1990 年代前後になると、「聯誼会」には、地縁組織によるものが 16、血縁組織によるものが 26、出現した。連絡事務所をシンガポールおよび香港といった、華人が多く、地理的にも便利で、かつ通信や事務的な面での機能を十分に発揮することが可能な発展した地域の宗郷会館内に設置し、世界各国の宗郷会館によって、持ち回りで定期的に（多くが 2 年に 1 回）「聯誼会」を開催するケースが多い。

例えば、1980 年成立の潮州系華人による「国際潮団聯誼大会」は、連絡事務所を香港潮州会館内に設置し、これまで香港、タイ、マレーシア、シンガポール、オーストラリア、フランス、米国などの潮州系華人が存在する地域で、2 年ごとに「聯誼会」を開催してきた。また、1990 年成立の福州系華人による「世界福州十邑同郷総会」は、連絡事務所をシンガポール福州会館内に設置し、2 年ごとに東南アジアを中心とした地域で開かれる「聯誼会」では、東南アジア諸国だけではなく、香港、中国、台湾、日本、北米、ヨーロッパ、オセアニアなど、世界中の福州系華人が存在する地域から関係者が出席している。一方、血縁組織の場合は「林氏懇親大会」、「黃氏宗親総会」といった単独の氏姓によるものもあれば、「世界至孝篤親舜裔総会」のように陳、胡、袁、姚、虞田、孫、陸、車、王の十姓からなるものもあり、東南アジアを中心として「聯誼会」が開催されている。

これら「聯誼会」の開催時には、マレーシアのマハティール首相（当時）やシンガポールのリー・シェンロン副首相（当時）、オン・テンチョン前大統領（当時）、さらには米国のクリントン大統領（当時）までが、開催地の政府を代表して祝電を打ち、支持の態度を表明している。また、シンガポールのリー・クアンユー上級相（当時）やウォン・カンセン内相（当時）、中国の李鵬・前首相、マレーシアの林良実（リン・リョンシク）運輸相（当時）などは、開会式に自ら出席することで、より積極的に会の発展を支援する姿勢を示した<sup>70</sup>。

世界各国の宗郷会館によって組織され、定期的に

開催されている「聯誼会」では、世界中に散らばる同郷人や同じ姓を持つ者たちが一堂に会して、故郷を懐かしみ、故郷の話題に花を咲かせているだけではない。彼らは「聯誼会」を通して、相互扶助、ビジネス・チャンスなどを得るための貴重なネットワークを築いている。まず、相互扶助について言えば、1995 年の阪神大震災や 1999 年の台湾地震の際に、世界各地の華人会館から両地の華人会館に対して、多額の金銭援助があったように、緊急時に援助の手をさしのべる関係でもある。また、同郷人の子女の海外留学に際しての保証人引き受けや、就職時の斡旋を依頼したりすることも、相互扶助の一つの形である。こういった相互扶助の精神は、従来からの華人会館の伝統であるといえる。

一方、ビジネス・チャンスを得るために、「聯誼会」に参加するビジネスマンも非常に多い。特に地縁による「聯誼会」の場合、潮州系華人ではバンコク銀行総裁の陳有漢（ソボンパニク）、バンコク・メトロポリタン銀行総裁の鄭午樓（テチャパイブン）、福州（福清）系華人ではシャングリラホテルで有名なクオック・グループ総裁の郭鶴年（ロバート・クオック）、インドネシア・サリム・グループ総裁の林紹良（ストノ・サリム）、マレーシア福華銀行総裁の林理化（リン・リーホア）、神戸中華総商會会長の林同春などの著名華人企業家が、各地の華人会館を代表して出席し、華人の方言グループの中でのネットワークを更に強化している。1994 年に、インドネシアのサリム・グループとマレーシアのクオック・グループが、砂糖事業で提携することを発表した、これも華人ネットワークとあながち無縁であるとはいえない。「聯誼会」には、関連する華人会館の指導者層から一般会員まで、誰もが参加できるが、こういった著名華人企業家と知り合うために、会館の会員になる若手ビジネスマンも多い<sup>71</sup>。

華人会館の世界的な提携の加速により「聯誼会」が相次いで開催される中で、2000 年 9 月 19 日と 20 日に、広東会館主催による第 1 回世界広東同郷聯誼大会ならびに同会の成立記念式典が、シンガポールで盛大に催された。大会には、ウォン・カンセン内相（当時）とウィー・キムウィ元大統領が列席したほか、日本を含むアジア各地や欧米、オセアニアからも 800 人に上る会館代表者が参集した。シンガポー

<sup>70</sup> 合田美穂「宗郷会館の世界的ネットワーク「聯誼会」(上)」: <http://news.nna.jp.edgesuite.net/free/mujin/copi/copi11.html>

<sup>71</sup> 合田美穂「宗郷会館の世界的ネットワーク「聯誼会」(中)」: <http://news.nna.jp.edgesuite.net/free/mujin/copi/copi12.html>



ルの広東系組織の関係者 700 人も出席し、研究者による広東系華人や広東省に関する基調講演や、粵劇（広東劇）、潮州劇、客家山歌、海南山歌の上演など、多彩な活動が繰り広げられた<sup>72</sup>。

シンガポールの華字紙『聯合早報』は、該大会を「世界初の広東系華人による大規模集会」と称し、大会成立を祝うと同時にその規模の大きさを賞賛していたが、実際には、広東系華人による世界的組織である広東同郷総会が 1990 年以前に、また広東同郷懇親大会が 1993 年に成立しており、すでに世界各地で十数回にもおよぶ大会を開催していた。両組織とも台北広東同郷会の毛松年理事が設立したもので、前者は故蒋介石未亡人の宋美齡氏が名誉会長を務め、後者は李登輝・前台湾総統、許水徳・国民党委員会中央秘書長（当時）、蔣経国・元総統の実子として知られる章孝嚴・華僑委員会委員長（当時）の支持を得ている組織であった。台湾側が組織するこういった政治色の強い聯誼会の中には、血縁によるものが比較的多い。2000 年に発足した広東同郷聯誼会をはじめ、同様の組織が相容れることなく多数存在しているのは、政治的要素が大きく影響しているためである<sup>73</sup>。シンガポールおよびマレーシアの華人会館の代表ならびに華人企業家たちは、現在、政治的背景にこだわらずに、こういった「聯誼会」におしなべて参加し、華人の世界的なネットワークを築いている。

加えていえば、こういった「聯誼会」において、使用される言語は華語である。世界各地からの参加者は、基本的に華語を媒介語として交流している。長きにわたり、華人組織（特にマレーシアの「董教総」）が、国内の華文教育の発展に力を注いできたからこそ、シンガポールおよびマレーシアの華人は、華語運用能力を保つことができおり、それによって「聯誼会」の開催や会への出席が容易になっているという事実を軽視することはできないのである。

## 8. むすびにかえて：華人会館の「ネットワーク」、「現地化」および「グローバル化」

多民族国家であるシンガポールおよびマレーシアで、華人会館がその役割を発揮するためには、「民族間の架け橋としての活動」、「華人のネットワークの構築および情報の提供」、「国益にかなう活動」という視点からの活動を行うことが重要であると筆者は、考えている。

シンガポール政府は、独立以降、多民族国家をまとめるために、「民族融和」を常にアピールしてきた。華人会館の存在は、一步間違えば、民族を分裂させる機能も持ち合わせている（と独立直後は考えられてきた）が、「民族間の架け橋」としての機能を、それ以上に持ち合わせているといえる。

シンガポール政府の民族融和政策を支持する華人会館の動きは、早い段階から徐々に始まっていた。例えば、1977 年に、「晋江会館」が、一部の会館機能を、晋江出身者以外の華人や、他民族にも開放しており、2007 年に、「福建会館」が、マレー語会話クラスを開講している。また、「同安会館」もまた、マレー舞踊クラスを開講している<sup>74</sup>。「新加坡宗郷会館聯合総会」も、2005 年以降、マレー伝統文化館、回教寺院、ヒンズー教寺院への訪問を企画したり、福建寺院見学や華人文化講座にマレー系住民を招待したりするなどといった、他民族との交流活動である「会館走透透シリーズ」<sup>75</sup>を開催している。そして、近年では、他民族と各民族の食文化を通して交流するという趣旨の、「種族和諧美食心連心」<sup>76</sup>と名付けられたグルメ・フェスティバルイベントも開催している。

マレーシアの「馬來西亞中華大会堂総会」が設立された際に、一番目の主旨として「我が国の各民族の親善と団結を図る」としたことは、非常に重要なことであると言える。1984 年以降、「馬來西亞中華大会堂総

<sup>72</sup> 海外の華人社会では、広東系華人が占める割合は比較的高いといえる。なぜなら、潮汕地域や、客家で知られる梅県や大埔は広東省の一部であるし、海南島はかつて広東省に所属していたことから、広東幫は潮州幫、客家幫、海南幫とも一部で重複しているためである。前述のように、広東系華人の大会で潮州劇や客家山歌、海南山歌が上演されたり、連瀛洲（リエン・インチョー）OUB 銀行総裁のように広東会館と潮州八邑会館の要職を兼任している華人が多いのはそういう理由からである。

<sup>73</sup> 合田美穂「宗郷会館の世界的ネットワーク「聯誼会」(下)」：<http://news.nna.jp.edgesuite.net/free/mujin/copi/copi13.html>

<sup>74</sup> 李焯然『回顧 25：宗郷総会二十五週年文輯』、新加坡宗郷総会聯合総会、2010 年、77 頁。

<sup>75</sup> 最近の活動は、2014 年 4 月 18 日に実施された「中央シーク寺院見学」であり、40 人を定員とする参加者を募った。事前にシーク寺院を見学する際の服装や禁忌についての説明もきちんとなされていた。「中央シーク寺院見学」活動についての詳細は、以下を参照：<http://www.sfcca.sg/node/1345>

<sup>76</sup> 「種族和諧美食心連心」については、以下を参照：<http://www.sfcca.sg/news/2009-8-12-clan-association-held-racial-harmony-heart-to-heart-food-of-the-general-assembly>

会」の主催で、各州の中華大会堂が持ち回りで、全国規模の華人文化フェスティバルを開催しているが、その主要目的の 1 つは、他民族の華人文化に対する理解を深めるということであった。1985 年に設立された「華社資料研究中心」も、不定期で研究書を出版したり、セミナーを開催したりして、華人文化を社会に浸透させる機会を提供し続けている。各地の華人会館でも、同様の活動が展開されている。こういった活動は、独立前の「華人の権益を守る」ためだけの活動を超越した、多民族国家に必要とされる「現地化」された文化交流活動である。

実際に、シンガポールやマレーシアの非華人（マレー系、インド系、アラブ系などの人々）は、華人文化について一定の理解はあっても、中国の地方文化についての理解は深くはない。他民族が、華人会館が企画する交流イベントに参加することによって、単なる「華人文化」に触れるだけではなく、福建、広東、潮州、海南といった異なる地域の華人文化を理解することも可能となるのである。そういう意味では、こういった中国の地方文化理解の交流活動は、政府が行うには限界があり、「華人会館」でなければできない活動でもあると言えるだろう。

次に重要なことは、「華人のネットワークの構築および情報の提供」を行うことである。近年、シンガポールの華人会館は、新移民および新移民組織との交流に積極的であるが、その交流の中で、シンガポールについて認識が浅い新移民が、シンガポール社会に溶け込めるように、華人会館が、同じ「華人社会の構成員」として、より多くの情報を提供していくことは重要であり、彼らとの人的ネットワークをより一層構築していくべきである。

また、従来から、華人会館は、海外における地縁ならびに血縁組織とのネットワークを構築することに貢献していた。例えば、「世界福清同郷聯誼会」のように、華人会館が中心となって、世界的な同郷組織を作るケースもその一例である<sup>77</sup>。1990 年代後半までは、政府の排華政策によって華人が表立って地縁ならびに血縁団体を組織することができなかったインドネシ

アでは、現地の華人企業家たちが、シンガポールの華人会館のメンバーになり、シンガポールの華人会館を通して、世界の同郷人たちとネットワークを築いていた<sup>78</sup>。こういったグローバル化されたネットワークの構築や情報の提供は、政府や個人ができないことであり、華人会館であるからこそ可能なことである。シンガポールやマレーシアの華人会館は、こういったネットワーク作りには、経験上からも長けていると言える。

近年、こういったグローバル化された華人の「聯誼会」の開催時には、シンガポールでは、リー・クアンユー上級相（当時）、リー・シェンロン副首相（当時）、オン・テンチョン前大統領（当時）などが、マレーシアではマハティール首相（当時）、アブドラ首相（当時）、ナジブ首相などが、現地で開催された開会式に自ら出席し、積極的に「聯誼会」の発展を支援する姿勢を示していることも、国家によって承認を得た活動であるということを証明している。

以上のような華人会館の「民族間の架け橋としての活動」、「華人のネットワークの構築および情報の提供」は、多民族国家であるシンガポールおよびマレーシアの強みにもなる。そして、民族融和が保たれている安定感のある国家として、国際的な国家としてアピールできる要素にもなる。それは、シンガポールおよびマレーシアの国益にもつながることになるだろう。

#### ＜参考文献・参考資料（引用順）＞

##### 1. 書籍・論文（日本語）

合田美穂「華人の歴史」、山下清海編著『華人社会がわかる本』、明石書店、2005 年。合田美穂「シンガポールにおける華人会館の変容と新たな役割」、『静岡産業大学研究紀要 環境と経営』第 20 巻（第 2 号）、2014 年 12 月。

合田美穂「シンガポール華人企業家にみられる象徴資本－黄祖耀を例として－」、『社会学研究』（甲南女子大学大学院論文集・第 19 号）、2001 年 3 月。

合田美穂「中国語教育の比較文化論：シンガポールと香港を例として」、『甲南女子大学大学院論集 人間科学研究編』第 2 号、2004 年 3 月。

合田美穂「シンガポールと香港における福建組織の教育事業の比較研究」、日中社会学会編『日中社会学研究』

<sup>77</sup> 合田美穂「新加坡華人会館與華族青年－社会学的考察」、『八桂僑刊』1992 年第 4 期、13 頁。

<sup>78</sup> 1980 年代から 1990 年代にかけて、インドネシアで活躍していた華人企業家の林紹良、陳子興は、ともにシンガポール「福清会館」および「世界福清同郷聯誼会」の名誉会員となり、シンガポールの「福清会館」を通して、中国の同郷との関係を強めていた。同じくインドネシア華人企業家でシンガポールの永住権を持つ唐裕は、シンガポールの「安溪会館」の主席を長年務めており、同様に中国の同郷とも強いつながりを持っていた。著名な華人企業家のみならず、一般のインドネシア華人ビジネスマンも、シンガポールの華人会館の会員となって、海外華人とのビジネスの機会を得ていた者も多い。インドネシア華人を取り巻く状況については、以下を参照：合田美穂「近年におけるインドネシアの対華人政策の変容」、『静岡産業大学研究紀要 環境と経営』、第 18 巻 1 号、2012 年 6 月。

第12号、2005年3月。

合田美穂「シンガポール華人企業家にみられる象徴資本－黄祖耀を例として－」、甲南女子大学大学院論文集、『社会学研究』第19号、2001年3月。

合田美穂（共著）「シンガポールにおける日本人会と九龍会の比較」、中牧弘孜編『日本の社縁文化』、東方書店、2003年7月。

合田美穂「近年におけるインドネシアの対華人政策の変容」、『静岡産業大学研究紀要 環境と経営』、第18巻1号、2012年6月。

## 2. 書籍・論文（中国語）

許雲樵著『南洋史（上巻 第二篇 古代史）』、新加坡世界書局、1961年。

朱傑勤著「元明時代中國人在東南亞各國的活動」、『東南亞華僑史』、中華書局。

潘翎主編、崔貴強編纂『海外華人百科全書』、三聯書店、1998年。

吳華『新加坡華族會館志 第一冊』、南洋学会出版、1975年。

王廣武「東南亞新興国家中の華人群族性」、新加坡亞洲研究学会、2006年。

李雄之「根系河洛的馬來西亞血緣性組織」、『海峽之聲』、2012年09月07日。

陳韋賡「從福州人移民海外談起」、『三山季刊』、第49期、出版年不詳。

文平強「馬來西亞華人社團一角色、功能與特性」、『馬來西亞華團總名冊』、星洲日報、馬來西亞中華大會堂總會（華總）聯合出版、出版年不詳。

吳龍雲、洪燕燕、潘慧珠「新加坡客家會館（上篇）：庇和會館、惠州會館、廣西暨高州會館」、黃賢強編『新加坡客家』、広州師範大学出版社、2008年。

「南洋客属總會章程」、『南洋客属總會第三十五至三十六周年特刊』、南洋客属總會、1967年。

「新加坡瓊州會館天后宮大廈落成紀念特刊」、新加坡瓊州會館、1965年。

「潮州八邑會館章程」、『新加坡潮州八邑會館四十周年紀念特刊』、新加坡潮州八邑會館、1969年。

合田美穂「新加坡與香港的福建社團及其教育事業的比較」、『亞洲文化』2007年第31期。

鄭良樹『馬來西亞華文教育史』、第1分冊、1998年。

湯鋒旺「二戰前新加坡華人“會館辦學”研究」、『東南亞研究』、2012年第4期。

曾玲「社会変遷與当代新加坡華人宗鄉社團的轉型與發展」、李元瑾編『新馬印華族群關係與国家建構』、新加坡亞洲研究学会、2006年。

曹雲華「試論馬來西亞的“新經濟政策”－從華人與原住民關係的角度進行分析」、『東南亞縱橫』、1998年。

林勇『新經濟政策與馬來西亞華人馬來人經濟地位的變化』、福建社會科學院、2011年。

石滄金「試析馬來西亞華人社會與祖國關係的演變以馬來西亞華人社團為例」、『華僑華人歷史研究』第二期、2006年6月。

石滄金「新世紀馬來西亞華人社團發展動態分析」、『世

界民族』2007年第一期。

石滄金『馬來西亞華人社團史研究』、暨南大學、2003年。

李焯然『回顧25：宗鄉總會二十五週年文輯』、新加坡宗鄉總會聯合總會、2010年。

合田美穂「新加坡華人會館與華族青年－社会学的考察」、『八桂僑刊』1992年第4期、13頁。

司徒曉昕「新加坡多名新移民華人會館走透透 認識華族文化」、『聯合早報』、2013年11月4日。

## 3. ウェブサイト

新加坡樹膠公会について、「福建省情資料庫」：<http://www.fjsq.gov.cn/ShowText.asp?ToBook=3161&index=1880&>

新加坡当商公会について、「新加坡当商公会ホームページ」：<http://www.singpawm.org/index.cfm>

新加坡車商公会について、「新加坡車商公会ホームページ」：<http://www.autoparts.com.sg/>

合田美穂「宗郷會館と華人企業家」：<http://news.nna.jp.edgesuite.net/free/mujin/copi/copi10.html>

「新加坡宗郷會館聯合總會」：<http://www.sfcca.sg/>

岡州會館樂劇部について：<http://www.chinanews.com/hr/2013/11-04/5458203.shtml>

南洋客属總會合唱団について：<http://www.sfcca.sg/node/1069>

鶴山會館国術醒獅団について：<http://sghoksan-cl.blogspot.hk/p/blog-page.html>

潮州美食講座について：<http://www.sfcca.sg/node/1308>

関公文化講座について：<http://www.sfcca.sg/node/1377>

「華裔館」：<http://chc.ntu.edu.sg/Pages/index.aspx>

「馬來西亞華人中華大会堂」：[http://www.huazong.my/chinese\\_association](http://www.huazong.my/chinese_association)

「馬來西亞華校董事聯合會總會」：<http://www.dongzong.my/index.php>

「馬來西亞華校教師會總會」：<http://web.jiaozong.org.my/>

「馬來西亞中華大会堂總會青年団」：[https://m.facebook.com/HuaZongQing/about?expand\\_all=1](https://m.facebook.com/HuaZongQing/about?expand_all=1)

「馬來西亞地緣性百年華團革新發展的經驗」：<http://hk.crntt.com/crn-webapp/cbspub/secDetail.jsp?bookid=32601&secid=32624>

リー・シェンロン首相の談話について：<http://www.sfcca.sg/node/393>

「通商中国」：<http://www.businesschina.org.sg/>

華族文化センターについて：<http://www.sfcca.sg/node/1422>

「馬來西亞華人公会」：<http://www.mca.org.my/cn/>

シンガポール社会に溶け込むための講座について：<http://www.sfcca.sg/node/1397>

シンガポール人の集団潜在意識を読み取る講座について：<http://www.sfcca.sg/node/1258>

シンガポールのインド族の歌舞風情について：<http://www.sfcca.sg/node/1362>

愛国歌唱大合唱について：<http://www.sfcca.sg/node/393>

リー・クアンユー元首相の談話について：<http://www.>



sfcca.sg/node/401

合田美穂「宗郷会館と華人企業家」：<http://news.nna.jp.edgesuite.net/free/mujin/copi/copi10.html>

合田美穂「宗郷会館の世界的ネットワーク「聯誼会」(上)」：<http://news.nna.jp.edgesuite.net/free/mujin/copi/copi11.html>

合田美穂「宗郷会館の世界的ネットワーク「聯誼会」(中)」：<http://news.nna.jp.edgesuite.net/free/mujin/copi/copi12.html>

合田美穂「宗郷会館の世界的ネットワーク「聯誼会」(下)」：<http://news.nna.jp.edgesuite.net/free/mujin/copi/copi13.html>

「中央シーク寺院見学」活動について：<http://www.sfcca.sg/node/1345>

「種族和諧美食心連心」について：<http://www.sfcca.sg/news/2009-8-12-clan-association-held-racial-harmony-heart-to-heart-food-of-the-general-assembly>